



## 不滅の女性像

松本 侑壬子・ジャーナリスト

ドイツの文豪ゲーテの『若きウェルテルの悩み』は、18世紀後半ヨーロッパ中を感動の渦に巻き込んで以来、恋愛小説の金字塔として輝き続けている。これまでゲーテ本人について描いた映画はなかったというが、恐らく、偉大過ぎる＝欠点のない人物は面白くないという思い込みのせいだろうか。

この映画は、この小説の基になったゲーテ自身の原体験の映画化である。だが、ここに描かれた青年ゲーテの何という気取らず率直で、純情で時に愚か、しかもユーモラスで可愛い気のある人間であろうか。さらには、頭脳明晰な美丈夫でありながら、傷つきやすく、悩み苦しむ一つまりは、実に生き生きと魅力的な若者なのである。

中部ドイツの小さな町の帝国高等法務院（裁判所）で研修生として働く23歳のゲーテ（アレクサンダー・フェーリング）は、歌の上手な若く美しいシャルロッテ（ロッテ）（ミリアム・シュタイン）に心惹かれる。前年に母親を亡くし、父親や7人もの妹弟の面倒を見ながら歌手になる夢を抱く娘。ゲーテは馬を駆ってロッテに会いに行かずにはいられない。前庭に洗濯物が干してある家の、ドアを開けるとちょうどパンを焼いているところ。早速、ゲーテはパン焼きの腕をふるって子どもたちと仲よくなる…。

### 『ゲーテの恋 ～君に捧ぐ「若きウェルテルの悩み」～』

ドイツ映画（105分）／  
フィリップ・シュテルツェル監督

TOHOシネマズシャンテ他全国ロードショー

深い緑の流れるような映像に、リズムのある物語展開で、ゲーテの弾む心が伝わってくる。ロッテは見た目の美しさばかりでなく、文学に自信を失ったゲーテをドキッとするような言葉で励ます賢さとやさしさを併せもつ。「ゲーテさん」とロッテが呼ぶとき、「ゲーテ」は「グ(ユ)ーテ」と聞こえるのが、何というか実に新鮮な響きである。（あ、これが正しい「ゲーテ」の発音なのか！と）。

ロッテは、恋文を待ちきれずにゲーテの宿舎まで馬車を走らせ、草原のただ中で逢引き中のゲーテに無理にも自作の詩を暗唱させ、雨宿りの城壁の陰で口づけを求め…と終始ゲーテをリードする。「私は実にいろいろなものを持っている。しかし彼女なくしては一切無となる」と書きつづるゲーテ。ロッテには「かわいいお嫁さんに」などという待ちの姿勢はない。抑え切れない恋の思いをたとえ雨に濡れようとも、共に燃やすことを怖れない。自宅に戻ったゲーテは、雨に濡れたシャツを脱ぎながら、彼女のリードで初めて思いを遂げた自分を「やられたな」と苦笑う。

だが、ロッテは父の勧める金持ち男性との愛なき婚約を受け入れる。子だくさんの家計を助けるためのやむを得ぬ手段だった。友の失恋自殺を契機にゲーテは自暴自棄の挙句、刑務所の中で小説『若きウェルテル…』執筆に没頭する。それは出版されると一晩にしてゲーテを人気作家にするが、この出版の手筈は誰が？ゲーテは再び「やられた」と深い喜びを噛みしめるのだ。生涯別れたままのロッテ（一度だけ再会）は、運命は受け入れるが、恋の意思は曲げない女性像として不滅の光を放っている。

